

# 一往直前

## 令和2年度3学期の始まりです

明けましておめでとうございます。13日間の冬休みはどうだったでしょうか？例年以上に今年の冬は寒い日々が続きましたし、コロナ禍で工夫しなくてはならない年末年始の行事や活動もありましたが、そんな中でも規則正しい生活は送れましたか？学年集会で各担当から伝えたことは守れましたか？いよいよまとめの3学期です。3学期は2年生になる0学期とも言われます。充実した3学期になることを祈っています。

### 始業式～1年生代表の言葉

私には3学期に頑張りたいことが三つあります。

1つ目は、学級委員の仕事です。私は後期学級委員に選ばれました。最初はクラスをまとめられるかがとても不安でした。ですが、私は学習委員として前期の学級委員さんがクラスを上手にまとめていた姿を見てきました。それを参考にしながら、前期の良さを受け継ぎ、もっとレベルアップしたクラスになるように努めたいです。そのために特に声掛けを頑張りたいと思っています。私はまだ、声掛けすることをためらってしまいます。だから、クラスのためにも、積極的に声掛けをしていきたいです。

2つ目は挨拶です。挨拶をすることを心掛けることは、学年の目標でもあります。中国では、挨拶という言葉には「心を開いて歩み寄る。」という意味があるそうです。私は中学生になって、たくさんの人と出会いました。初めは、多くの人と友達になれるか心配でした。しかし、毎日自分から挨拶することによって心の距離が少しずつ近づき、どんどん友達がふえていった気がします。また、地域の方々も私が挨拶をすると、挨拶を返してくれます。その時、地域の方々はとても笑顔だし、私も自然と笑顔になります。挨拶は人を笑顔にできる、そして人と人との関係を築く大切なコミュニケーションの一つだと思います。だから、自分から挨拶することをこれからも心掛けたいです。

3つ目は部活動です。私はバレーボール部に所属しています。バレーボールは、チームで協力することや力を合わせる事がとても大切です。ボールを繋ぐことはチームの絆も繋いでくれると思います。そして、その上での技術の向上も必要不可欠です。私はセッターという、チームの司令塔のようなポジションに選ばれました。チームをまとめながら、仲間と試行錯誤し、無駄のない練習をしたいです。そして今月予定されている大会でも良い結果を残せるように頑張りたいです。

3つのことを特に意識して、3学期も楽しく頑張りたいと思います。

1年生の2学期は、1学期の反省をして新たに決めた目的の土台を作り上げていきたいと思っています。

1年代表 1年4組 梶田 有伽



## 生き方のヒント

『犬のうんちを踏んでも感動できる人の考え方 ものの見方クイズ』（ひすいこたろう著）にこんな話が載っていました。年の初めに見方・考え方を新たにするのにとてもいい話ですので、ご紹介します。

～ インドの王様の、ある家臣は「これについて、おまえはどう思う?」と王様から聞かれると、必ずあるセリフを言ったそうです。その結果、王様からたいへん信頼されました。さて、その家臣のセリフとは何でしょう?

ジャナカ王の家臣にアシュタバクラという者がいました。その男は、王様から「これについて、おまえはどう思う?」と聞かれると、いつもきまって、あるセリフを言いました。

「起こることは、すべて最高でございます」

何が起きてても、そう言われたら悪い気はしない。その結果、彼は王様からとても信頼されました。

しかし、やがて、他の家臣たちが、アシュタバクラに嫉妬するようになり、ある日、王様が手にケガをしたとき、ワナにはめられてしまうのです。

家臣たちが、アシュタバクラに「王様がケガをされたことを、どう思う?」と聞いてきたのです。これに対して「起こることは、すべて最高」と答えたら、王のケガを喜んでいるようにもとられます。さあ、アシュタバクラどうする?

彼は答えました。「起こることは、すべて最高でございます」

すぐに家臣たちは王様に告げ口をしました。

「王様!アシュタバクラは、王様のケガのことも最高とっております」

怒った王様は、アシュタバクラを牢屋に入れてしまいました。

そして、王様が狩りに出かけたある日のこと。

王様は“人食い部族”に捕まってしまったのです。その部族は儀式のときに人を生け贄として火あぶりにします。王が火あぶりになる直前、彼らは王の手にケガがあることに気づきます。この部族には、傷ものは生け贄にできないというしきたりがあったので、「もうお前には用はない」と王様は放免されました。

無事に帰って来ることができた王は、アシュタバクラを出してあやまりました。

「わしが手にケガをしたのは、おまえの言う通り最高の出来事であった。どうすれば、この過ちをつぐなえるだろうか?」

アシュタバクラは言いました。

「もしも、私を牢屋に入れてくださらなかったら、私はいつも狩りでは王様の側から離れないので、いっしょに捕まっていたことでしょう。そして、ケガをしていない私は、生け贄になっていたことでしょう。だから、私は牢屋に入れていただいて最高だったのです」

王様はここで悟ります。「人生で起きることは、本当にすべて最高ののだ」と。

さて、アメリカの成功者たちへのアンケートを見ても、そのことがわかります。

彼らがあげた成功した理由のベスト3。それは…。

「病気」「倒産」「失恋」でした。

あの病気のおかげで…。一度倒産したおかげで…。失恋したおかげで…。すべて、いわゆる不幸ばかりです。失望したくなるようなことばかりです。しかし、彼らはこのつらい出来事を、「自分を深く見つめ直す機会」に変えて、生き方を改めたのです。すると、災いは転じて福となったのです!つまり、「失望」すら「希望」の一部なのです。～

この話を聞いて、私が最初に思ったのは「人生万事塞翁が馬」という故事です。意味は、「人生における幸不幸は予測しがたいということ。幸せが不幸に、不幸が幸せにいつ転じるかわからないのだから、安易に喜んだり悲しんだりするべきではないというたとえ。」のことです。昔、中国北方の塞（とりで）近くに住む占いの巧みな老人（塞翁）の馬が、胡の地方に逃げ、人々が気の毒がると、老人は「そのうちに福が来る」と言いました。やがて、その馬は胡の駿馬を連れて戻ってきたのです。人々が祝うと、今度は「これは不幸の元になるだろう」と言いました。すると胡の馬に乗った老人の息子は、落馬して足の骨を折ってしまいました。人々がそれを見舞うと、老人は「これが幸福の基になるだろう」と言いました。一年後、胡軍が攻め込んできて戦争となり若者たちはほとんどが戦死しました。しかし足を折った老人の息子は、兵役を免れたため、戦死しなくて済んだという故事に基づきます。今年はどうなにか辛いことでも、それを楽しい、最高だと思える心もちを常に心掛けていきたいなと感じました。

